

B 125 紅型の隈どりと辻が花染  
熊谷職業和裁学院(非常勤) 嘉陽妙子

目的 先の第31回日本家政学会九州支部研究発表会において「根差部親方の遺品にみる綾り染め」と題し、日本本工の室町時代の辻が花染(初期のもの)と非常に類似した綾り染めが、16世紀に琉球にも存在していたことを発表した(予定)。この辻が花染であろうと思われる綾り染めが存在したことにより、紅型と辻が花染との関係が浮びあがった。本研究では、特に紅型の隈どりを中心にして、辻が花染と紅型との関係を考察する。

方法 琉球王朝時代の紅型を図版で調べ、その中から辻が花染のぼかしの技法と共通するものを産び出した。図版にある紅型の隈どりの技法については、金城紅型工房の金城昌太郎氏にご教示いただいた。その他、文献資料もあわせて検討を行った。

結果 紅型の隈どりは文様や色によつて形が変わってくるが、辻が花染のぼかしと非常に共通すると思われるものに「マルグマー」「ナカジングマー」「ウチグマ」がある。また特殊な技法として文様の一部に筆で墨の細い線を入れる「キガチ」がある。このキガチとウチグマを併用したものは特に辻が花染の虫食いの技法に似ている。

図版によると、紅型の遺品として最古のものは尚円王(1470-1476年)の時代にまでさかのぼることが推定されるとしている。

これらのことから、16世紀琉球に辻が花染と非常に類似した綾り染めが存在したことにより、紅型の隈どり、キガチは辻が花染と密接な関係があり、紅型は辻が花染の影響を受けて奥行のある紅型へと発展して行ったと考えられる。